研究のまとめ

松江市乃木小学校　２年３組実践

報告者　安部　敦

１　単元名　ボールゲーム「テニピン（ネット型)」

２　単元の目標

〇テニピンの行い方を知るとともに、用具を使ってボールを返球したり、ボールを打ちやすい場所に体を移動したりして、易しいゲームをすることができる。（知識及び技能）

〇ラリーを続けるために、ボールを打ち返すための方法や打ちやすい場所などについて考えたりするとともに、考えたことを友達に伝えることができる。

（思考力，判断力，表現力等）

（３）テニピンに進んで取り組み、ルールを守って誰とでも仲良く運動をしたり、勝敗を受け入れたり、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができる。

（学びに向かう力，人間性等）

３．単元計画

時間	１	２・３・４	５・６
ねらい	テニピンを知り、学習の見通しを持つ	１対１のラリーが続くための打ち方を考える。	２対２のラリーが続くための打ち方を考える。
学習内容	ボールに慣れる ・素手でのキャッチ＆パス ラケットになれる ・一人打ち ・ペア打ち	スキルアップタイム ・素手でのキャッチ＆パスゲーム ・ラケットで連続ボール打ち ・ラケット使ってのペア打ち （一方はキャッチ） ノーバウンド打ち ワンバウンド打ち １対１のラリーゲーム ・練習 ・アドバイスタイム ・チャレンジタイム	スキルアップタイム 2～4 時間目と同じ ２対２のラリーゲーム ・練習 ・アドバイスタイム ・チャレンジタイム

４　授業の実際

〇視点１について

決められたルールの中で相手と競い合って、勝利をめざすことにゲームの楽しさがある。学習指導要領では低学年のボールゲームとして、攻めと守りが分かれたコートで相手コートにボールを投げたりする簡単な規則で行われる易しいゲームが例示として挙げられている。中学年のネット型では、素手でボールを扱うソフトバレーを行うことが多いが、テニピンは用具の操作も伴うため、２年生の子どもたちにはかなりハードルが高いと考えた。そこで今回は対戦型のゲームに繋がる前段階として、ラリーをつなげることをゴールとした単元計画を立てた。また、ラリーの障害となるネットも今回は取り除き、ラリーができるだけ続きやすい条件で行っ

た。２時間目くらいまでは２回くらいしか続かない児童がほとんどであったが、授業の回数を重ねるごとに少しずつつながる回数は増えていった。しかし最終的には 10 回を超えるペアは、半分いかなかった。

〇視点 2 について

スキルアップタイムの取り組み

・『素手でのキャッチ＆パス』、パスはアンダースローで投げることとし、ラケットを振る軌道を意識させた。

・『ラケットで連続ボール打ち』、ラケットの面を意識させた。

・『ラケット使ってのペア打ち（ノーバウンド打ち・ワンバウンド打ち)』一方はキャッチすることで、自分の思い通りの場所（相手が取りやすい場所）に打つことを意識させた。

〇視点 3 について

なりたい姿を「ボールをねらったところ打つことができる」とし、技能習得に向けてグループ内でのアドバイスタイムを設定した。見合う視点として①ラケットの振り方②ボールを落とす場所③体の動き（落下点への移動、体や脚の向き、立ち位置）④ボールを打つタイミングを与えた。1 時間に 1 つの視点に絞って考えさせ、全体でも共有する場をもった。

ラケットの振り方について児童から出た考え
・やさしく振ったほうがいい。
・ラケットは下から上に向けて振るといい。
・ラケットの中心にボールを当てるようにするといい。　など

授業の振り返りの中で、「友だちのアドバイスをやってみたら、ラリーがつながるようになってうれしかった」という感想がたくさんあった。

５　成果と課題

授業を積み重ねて経験が増えるにしたがって、少しずつラリーが続くようになったが、２年生の本学級の子どもたちにとってワンバウンドでボールをつなぐということはやはり難しい技能であった。ラリーがたくさん続かなくても子どもたちが楽しく意欲的に取り組んだことは教材の魅力であると思うが、ねらったところに打ったら得点になるような、相手の返球のない得点ゲームにしたほうがより活発な活動にできたのではないかと実践を終えて感じた。次回２年生の取組として行うときは、個人スキルの習得を目指したゲームをやってみたいと思う。

また、本校は人数の多い学校であり、今回も 33 人で体育館の半面を使用して活動した。場所が狭く、活動の制限も多かった。今回はライン等もなしにしたことで、狭い中でも活動をすることができたが、対戦型のゲームをする際はより広い場所が必要となるため、体育館の全面が使用できるように校内での調整を早めにしておく必要がある。

最後に、規制の用具がそろえてあることで、テニピンの学習に容易に取り組むことができるので、今後は校内の教員へ情報を発信し、広めていきたい。